

エルサレムに誕生したキリスト教の最初の七人の執事(役員)の筆頭者である「**信仰と聖霊に満ちている人ステファノ**」(6:5)、この人がユダヤ教最高法院に引いて行かれた。そこで「**偽証人**」たちが訴えたのは、「**わたしたちは、彼がこう言っているのを聞いています。『あのナザレの人イエスは、この場所—エルサレム神殿—を破壊し、モーセが我々に伝えた慣習を変えるだろう』**、こういうことを「**言っている**」と、そういう訴えである。

この訴えに対して、1節の「**訴えとおりか**」と大祭司が問うのに答えたステファノの答えが、7章の殆ど全体を占める形になっている。今までのペトロの説教は、知らずにイエスを十字架につけたユダヤ人たちに“悔い改めて、罪の赦しを得なさい”と、真摯に呼びかけるお話ばかりであった。それに対して、今回のステファノの話は、きっぱりとユダヤ教の罪を指摘して、ユダヤ教徒とキリスト教徒とははっきり違うということ突きつけるという、そういう説教になっている。

2-3 節

そこで、ステファノは言った。「**兄弟であり父である皆さん、聞いてください。わたしたちの父アブラハムがメソポタミアにいて、まだハランに住んでいなかったとき、栄光の神が現れ、『あなたの土地と親族を離れ、わたしが示す土地に行け』**と言われました。」

「**兄弟であり父である皆さん、聞いてください**」という言葉は、直訳すると「**男たち、兄弟たちと父たちよ、聞け**」となる。

主イエスがルカによる福音書21章12,13節で、「**これらのことがすべて起こる前に、人々はあなたがたに手を下して迫害し、会堂や牢に引き渡し、わたしの名のために王や総督の前に引っ張って行く。それはあなたがたにとって証をする機会となる**」と言われたように、キリスト教にとって法廷での弁論というのは、言い掛かりに答えるという消極的なものではなくて、積極的にキリスト教の福音を「**証しする機会**」、そういうものとして捉えられている。だから、「**男たち、兄弟たちと父たちよ、聞け**」というのは、旧約聖書の預言者たちが「**イスラエルよ、聞け**」(シェーマ・イスラエル)と呼びかけるあの口調である(申6:4、9:1、エゼ18:25、ホセ4:1)。

「**アブラハム**」から、ステファノは話を始める。これは、ヨシュア記の24章にあるヨシュアがシケムで契約を結んだ時の演説の始まりと同じである(2-3節イ)。

「**ヨシュアは民全員に告げた。『イスラエルの神、主はこう言われた。「あなたたち**

の先祖は、アブラハムとナホルの父テラを含めて、昔ユーフラテス川の向こうに住み、他の神々を拝んでいた。しかし、わたしはあなたたちの先祖アブラハムを川向こうから連れ出してカナン全土を歩かせ、その子孫を増し加えた。」』」

この2節から8節までにアブラハム物語をステファノは語っているが、これは結局、創世記11章27節から35章までという非常に長い物語を、実に見事に短く要約している物語である。

2節の「**メソポタミア**」というのは「二つの川の間」という意味のギリシア語で、チグリス、ユーフラテスという二つの大きな川の間にはさまれる地域のバグダード以北であるから、実は、「**ハラン**」もその中に入る。だが、「**メソポタミアにいて、まだハランに住んでいなかったとき**」とステファノが言っているのは、結局その次の4節に出てくる「**カルデア人の土地**」ウル、カルデアのウルで「**栄光の神が現れ**」て召したことを言いたいのであろう。

ところが、創世記の物語では、カルデアのウルからハランまで移る時には、お父さんのテラが主導して家族が皆ついて引っ越した、そして、ハランで神様がアブラハムを召して、「**父の家を離れて**」旅するという旅立ちをさせた、ということになっている。

その父のテラに従ってカルデアのウルからハランまで引っ越す最初の時からもう既に神の導きがあったということは、実は創世記自身が15章7節で記していることである。「**主は言われた。『わたしはあなたをカルデアのウルから導き出した主である。わたしはあなたにこの土地を与え、それを継がせる』**」。だから、ネヘミヤ記も、「**カルデアのウルから導き出した神**」(9:7)という。

先ほどのヨシュア記24章で言われているように、「**川向こう**」で異教の異なる「**神々**」に仕えている環境の中から、「**栄光の神**」が特にアブラハムを選んで導き始められた、このことを強調するために、「**メソポタミアにいたとき**」、また「**ハラン**」に移り住まない前から、「**栄光の神が現れ**」て召したのだと、そう言いたいのであろう。

「**栄光の神**」。この言葉で言おうとしているのは、ステファノを訴える人々が「**ナザレの人イエスは、この場所を破壊するだろうと**」言ったステファノという「**この男**」は、神殿を侮辱している、汚していると訴えていたわけだが、「**栄光の神**」は、そういう「**場所**」にとらわれる方ではない。エルサレムでなくても神殿でなくても、カルデアのウルで、既に異教徒たちに囲まれている中で、アブラハムに姿を現しアブラハムをお召しになることのできる、自由で主権的な生ける神であられる。このことをステファノは強調したかったのであろう。

4-5 節イ

「それで、アブラハムはカルデア人の土地を出て、ハランに住みました。神はアブラ

ハムを、彼の父が死んだ後、ハランから今あなたがたの住んでいる土地にお移しになりましたが、そこでは財産を何もお与えになりませんでした、一步の幅の土地さえも。しかし、そのとき、まだ子供のいなかったアブラハムに対して、『いつかその土地を所有地として与え、死後には子孫たちに相続させる』と約束なされたのです。」

ここでステファノが引用しているのは、創世記 15 章 7 節と 18 節。この約束をもう少し丁寧に、6 節から 7 節に書いている。

6-7 節

「神はこう言われました。『彼の子孫は、外国に移住し、四百年の間、奴隷にされて虐げられる。』更に、神は言われました。『彼らを奴隷にする国民は、わたしが裁く。その後、彼らはその国から脱出し、この場所でわたしを礼拝する。』」

この引用は、創世記 15 章 13 節から最後までを少し省略しながら引用している。そこでアブラハムに、ハガルによる息子イシュマエルがいたこと、あるいは妻サラを葬るためにマクペラの洞穴と畑を買い取ったことなども語られているが、実は創世記 15 章の神様の約束を聞くまでの時点では、イシュマエルの誕生もマクペラの購入もない。だから、確かに、ステファノの言う通り「財産を何もお与えになりませんでした、一步の幅の土地さえも」ということも、それから「そのとき、まだ子供のいなかったアブラハムに」ということも、確かにその通りである。

8 節

「そして、神はアブラハムと割礼による契約を結ばれました。こうして、アブラハムはイサクをもうけて八日目に割礼を施し、」

これは創世記 17 章と 21 章 3, 4 節を縮めたものである。

「イサクはヤコブを、ヤコブは十二人の族長をもうけて、それぞれ割礼を施したのです。」

この言葉は、創世記 25 章 19 節から 35 章までの長い物語を一口で言ったもの。

ステファノがこのアブラハム物語で強調したいことは、恐らく、神様の約束というものがどんなに確かなもので確実に実現したか、ということであろう。

ステファノは、2 節で「わたしたちの父アブラハム」と語った。つまり、「まだ子供のいなかったアブラハムに対して」神様が「いつかこの土地を」「子孫に」与えると、土地と子孫、この両方を「約束なされた」。その約束は見事に実現して、今「わたしたち」というイスラエルが存在しているわけである。その「わたしたちの父アブラハム」。あるいは、「一步の幅の土地さえも」お与えにならなかった「土地を所有地として与える」という土地は、4 節でステファノが言う通り「ハランから今あなたがたの住んでい

る土地にお移しになった」。今現に**「あなたがた」**はその約束の土地に住んでいる。そういうふうに神の約束はこの点でも見事に実現した。

こういう神様の確かな約束の実現を、ステファノも相手のユダヤ人たちも、今、現に味わっているのである。

最後に、ステファノが創世記のアブラハム物語のあちこちを自由に抜き出して語って来た中で、注目すべき点があるので記す。

創世記 15 章 31 節から 21 節までをステファノは要約して引用しているが、その創世記 15 章の 18 節から 21 節を引用するのに、**「あなたの子孫にこの土地を与える」**という約束 (18 節) をちょっと変え、その約束をいよいよ神様が実行に移される時の言葉、すなわち、モーセの出エジプト記の神様の言葉 (出 3:12) に置き換えている。

「神は言われた。『わたしは必ずあなたと共にいる。このことこそ、わたしがあなたを遣わすしるしである。あなたが民をエジプトから導き出したとき、あなたたちはこの山で神に仕える—礼拝する。』」

ステファノは 7 節において、創世記の言葉を、出エジプト記のこの言葉 (**「この山で神に仕える—礼拝する」**) に置き換えている。つまり、**「この山で神に仕える—礼拝する」**と言う言葉は、創世記 15 章には語られていない。

この置き換えであるが、モーセに語られた時には**「この山で」**、つまり「ホレブ山で」と言われたものを、ステファノは**「この場所」**、すなわちパレスチナであれ、エルサレムであれ、というふうに置き換えている。

この置き換えを通してステファノが言おうとしているのは、神様を礼拝するときに重要なことは「場所」あるいは「土地」ではなく、**「栄光の神」**が主権的に現れて召し、そして約束し、その約束を実現なさり、奴隷になっていた人々が贖い出されるその贖いが実現した“状況の中で”礼拝するということであろう。

ステファノがここで明らかにしているように、墮落した罪人の私たちが本当に今**「栄光の神」**をほめたたえて礼拝することができるのは、むしろ**「栄光の神」**が私たちを選び、召し、そして約束を与え、その約束を確実に実現してきてくださり、私たちを罪から贖い出してくださったという、この感謝と喜びと信頼から、神を礼拝するということが始まる。**「この場所」**、エルサレム神殿とか、そんな問題ではない。

そういう「場所」にこだわる礼拝ではなくて、本当に私たちが**「栄光の神」**と出会い、この神様の言葉を受け、そして神様がその約束を実現してくださって、罪から贖われた、奴隷の身分から解放されたという、その喜びと感謝がある時に、礼拝ということが生まれてくる。このようにステファノとしてはこたえないのではないかと思う。

私たちも、その意味で、本当に礼拝の原点をもう一度見直して、神様を礼拝したい。